

実践報告

短期海外研修が参加学生に及ぼす影響と効果

(地方の医療・福祉系大学における国際交流事業の取り組みより)

沼沢 明美^A、中島 有季子^A、町田 修三^B、ターン クリストファー^BThe Effectiveness of Short-term International Programs
(A Study of the Medical, Healthcare and Interdisciplinary International Programs)Akemi NUMAZAWA^A, Yukiko NAKAJIMA^A, Shuzo MACHIDA^B,
Christopher TARN^B

Abstract: This study reports the effectiveness of the short-term international programs conducted by Takasaki University of Health and Welfare by running a quantitative and qualitative analysis of data acquired from 67 students who joined the 2019 and 2020 programs. A “Global Competence Self-evaluation Rubric” was used to compare their knowledge, skills, and attitudes “before” and “after” participating in those programs. The data obtained showed a discernible positive improvement in almost every category of the rubric from the “before” and “after” responses. In addition, we classified the information obtained from the students’ written report about their motivation and experiential education acquired during those programs into 5 categories. We integrated the 5 categories into a chart and a table under the titles “Reasons and purpose for participation”, “Overall Comparison Between Countries”, “Re-evaluation of Self-Esteem”, “Human Relationships”, and “Clarification of the Motivation for the Future”. The underlying outcome shows that the program helped students to gain new knowledge and expertise in their fields, helped them to improve their personal skills, improved their self-confidence and provided an incentive to challenge new obstacles.

Keywords: short-term international programs, Global Competence Self-evaluation Rubric, categories of students’ report, effectiveness of the program

キーワード：短期海外研修、グローバル度自己評価ルーブリック、学生レポートのカテゴリ化、研修の効果

1 はじめに

日本政府は、2013年に「日本再興戦略」や「第二期教育振興基本計画」をもとに、グローバル化を推進する国内人材の確保・育成の必要性を示しており、グローバル化した社会において活躍する人材を育成することが喫緊の課題であるとして、2020年までに日本人の海外留学者数を倍増（大学等：6万人から12万人）させることを掲げた¹⁾。関係府省庁が海外留学を促進させる具体的取り組みとして、日本学生支援機構による

「海外留学支援制度」の他、「スーパーグローバル大学等事業」や、「官民協働海外留学支援制度～トビタテ！留学JAPAN」の推進などがあげられる。2018年現在、独立行政法人日本学生支援機構が実施する「協定等に基づく日本人学生留学調査」²⁾によると、大学等が把握している日本人学生の海外留学状況は、2018年度で、115,146人（対前年度比9,845人増）である。同調査の留学期間内訳を見ると、1ヶ月未満の短期研修は全体のおよそ65%であり、6ヶ月未満の留学を含めると全体の86%を占める。短期留学が多い背景には、授業との兼ね合いや経済的負担、就職活動への影響などの理由があげられる。一方、「グローバル人材育成

A: 高崎健康福祉大学国際交流センター

B: 高崎健康福祉大学健康福祉学部

の推進に関する政策評価」³⁾の中で、企業が理想とする留学期間については、約8割の企業が、1年以上、または6ヶ月以上1年未満の、中・長期の留学が理想と回答しており多数を占める短期留学者はその要件に見合っているとは言い難い。

このような課題を抱える中、留学を促進する送り出し機関、また学生にとっての海外留学の意味、海外研修の効果や影響の測定、その可視化の重要性が議論されるようになった。文部科学省は2017年に日本人による海外留学の人材育成上の効果を客観的に検証することを目的に委託研究⁴⁾を実施した。その中で2016年度海外留学支援制度の留学を対象とした14,280名の学生アンケート調査結果では、1ヶ月未満の短期留学においても、およそ半数の学生が、能力が伸びたと自己評価しており、基礎統計においては渡航期間に関わらず留学における効果があり、留学すること自体が最も重要であることを示す結果だとしている。しかし満足度評価は回答者の主観に左右される点や他者との比較可能性の担保が難しいこと、同調査データ内の膨大な自由記述内容は有益な情報として取り上げることが困難であったことも指摘されている。

アメリカでは、2000年始めころから海外研修の学生へのインパクトについて大規模調査が行われている⁵⁾。⁸⁾国際教育に熱心であり、各国へ多数の留学プログラムを提供するミシガン州立大学では、学生の海外での学びに関するアセスメントツールの開発やその評価が積極的に行われるなど、海外研修は言語力の向上のみならず、異文化理解、批判的思考、コミュニケーション力などを育てる機会として重要視されている。Wong (2015)⁹⁾は、かつて海外研修は異なる文化に身を置くことだけで充分学生の成長が見られるとされていたが、学生が学びの経験から思慮深さや国際感覚をどのように得て、また向上できるかというプロセスが重要であり、そのためには教育者や研修企画者、引率者の適切な介入や仕組み作り、活動内容の選定が必要であることを述べている。また評価測定方法は数多くあるが、プログラムの実際と照らし合わせた研修評価や多面的な評価の判断が必要としている。

このような、海外研修のあり方や評価についての動向を注視し、これまで筆者らの大学で取り組んできた国際交流プログラムについて、海外研修に参加した学生の体験を通した学びと気づきを量的、質的の両面か

ら分析することで海外研修が学生にどのような影響を及ぼすのかを追求し考察することを本研究の目的とした。また、学生の参加動機や期待、研修のどのような活動、出来事、状況から気づきや内面的な変化、学びを得ているのか、それらの関係性を示すことを試みた。

2 高崎健康福祉大学における海外研修の特徴

高崎健康福祉大学(以下、本学)では2010年の国際交流センター¹⁰⁾開設以来、医療・福祉分野の国際化に対応するため、また他の医療・福祉系大学との差別化を図るという目的のもと、同センターが中心となり海外提携大学との相互派遣プログラムを構築してきた¹¹⁾。過去3年間(2016~2018年)の年間平均で派遣者数87人、受入れ者数51人である。多くの学生が国家資格受験要件を満たすためのカリキュラムに沿った過密なスケジュールを余儀なくされているため、大学主催のプログラムは春または夏の長期休暇中、更に10日から2週間の短期間とせざるを得ないが、短期間の海外研修においても各研修の目的や双方のニーズに見合う内容とするため、PDCAサイクルに沿い、過去の研修からの経験、現地でのコネクション、参加学生・引率者からのフィードバック等を活かし、本学独自のプログラムを作り上げている。本稿研究対象である4研修(ベトナム、オーストラリア、フィンランド、ドイツ)の内、現地の具体的なプログラムの一例として、ベトナム派遣時のスケジュールを表1に、各研修の様子を図1~図4に示す。また、これらの研修は、全学科¹²⁾全学年対象であり、自由参加のため、各プログラムに複数の学科、異なる学年からの参加がある。

本学の海外研修の特徴として、1) 外部業者に委託することなく、国際交流センタースタッフが受け入れ先提携大学の教員、スタッフと直接協議し、講義、視察先、学生交流、宿泊先、移動手段等、細部に至るまで、研修を包括的にマネジメントしており、学生の参加コストを抑えることに成功している。2) プログラムには病院、福祉施設、教育施設等への視察を組み入れているが、参加学生の専門性に合わせ、病院内でも学科ごとに分かれて行う等、細かな配置が可能である。3) 講義は可能な限り実験や演習への参加とし、視察先でも現地の人へ能動的なアプローチを行う等、体験型の内容にしている。4) 全学科全学年対象の募集のため、先輩、後輩または、他学科の人との学び合いと交流が

表1 2019.3月 ホーチミン医科薬科大学(UMP)研修スケジュール

Day	薬学科	看護学科	理学療法学科	社会福祉、健康栄養、子ども教育学科
1	大学バスにて成田空港へ移動 ホーチミン着後 専用バスにて空港からアパートメントホテルへ移動			
2	戦争証跡博物館見学、枯葉剤被害者との交流(双方の文化紹介、手作り雑貨の制作協力、購入、学祭での販売金を寄付) UMP学生と昼食 交流			
3	ウェルカムセレモニー			公衆衛生学部 福祉、 栄養イントロダクション HCMC栄養センター視察
	薬学部イントロダクション Botanic Garden 視察、Saigon Zoo見学	医療技術学部イントロダクション		
4	地域薬局訪問 / 漢方博物館	大学病院(UMC)ICU視察	大学病院(UMC)ICU視察	大学病院(UMC)視察
	国立チョーライ病院視察(JICAプロジェクト)			
5	研究室訪問、実験(微生物学分野)	スキルラボ参加	大学病院(UMC) 整形外科部門視察	高齢者施設視察
	医薬品物流企業視察 (DKSH Vietnam Co., Ltd.)	ハノイへ移動	義肢製作所視察、義肢使用者とのミーティング	障害児通所施設視察
6	研究室訪問、実験(製剤学)	JICA 看護プロジェクト視察	私立病院視察	幼稚園訪問、交流(折り紙)
	研究室訪問、実験 (分析化学、医薬品品質管理分野)		学科にて授業、演習参加	小児病院視察(心療内科)
	UMP学生によるセレモニー デイナー		UMP学生によるセレモニー デイナー	
7	HCMC Agricultural Hi-Tech Park視察 歴史体験 クチトンネル	JICA 事務所視察	骨形成不全症児の入所、リハビリ施設、サプリメント開発、研究所視察	
8	地域探索 メコンデルタツアー	ハノイ市内探索 ホーチミンへ移動	地域探索 メコンデルタツアー	
9	学生交流(自由)			
10	ボストン製薬視察	熱帯性感染症病院視察	小学校訪問 折り紙授業の実施	
	薬学科セレモニー	文化体験(アオザイ、教会)	文化体験 (アオザイ、寺院)	
	クロージングセレモニー 修了式 フェアウエルパーティ			
11	アパートメントホテルチェックアウト 空港へ移動 成田着 専用バスにて大学へ			



図1 ベトナム 薬学部実験

図2 オーストラリア
クラスメイトと図3 フィンランド
車椅子体験授業図4 ドイツ バリア
フリーシステム
体験授業

できる。5) 研修には本学から教職員が引率として同行するが、現地では受け入れ先の教職員、学生などが中心となりプログラムを牽引するため、参加学生は、講義、視察、ディスカッションの場から、文化交流、地域探索まで、現地の人たちと多くの時間を共にすることができ、学生間の交流が大変積極的に行われる。その他、6) 事前事後研修も実施している。渡航前の事前研修では、文化、歴史、医療・福祉制度といった基本情報についての調査や、現地でのプレゼンテーション、ディスカッションに備えた英語での準備を行っている。研修後は個々の学びや気づきを参加者全員で共有する時間を設け、個人レポートによる振り返りとまとめを経て海外研修報告会でその成果を在学生へ発信している。

このように事前研修から現地での本研修、事後研修までの一連の流れの中で、専門的知識を深めるだけではなく、座学では得られない経験を基に、他者への配慮や社会的気づきなどを促し、学生が自己の資質を高める機会となるようなプログラムを目指してきた。

3 研究の概要

3.1 研究対象者

2019年3月から2020年2月に本学で実施した全学科対象の4海外研修で、本研究の協力に同意した参加学生67名を対象とした(表2)。

表2 学科別調査対象者数

学科/ 学年 研修/ 実施時期	学年	医療情報 学科	社会福祉 学科	健康栄養 学科	看護学 科	理学療法 学科	薬学 科	子ども 教育学 科	学年 毎計	合計
ベトナム 海外研修 2019.春12日間	1 2 3 4		3	2 2	2 2	1	3 3 1 4	3	10 11 1 4	26
オーストラリア 海外研修 2019.夏17日間	1 2	1		3 3	1 2		1	5	10 6	16
フィンランド 海外研修 2019.夏11日間	2 3 4	2		2	3		3 1 2		8 3 2	13
ドイツ 海外研修 2020.春11日間	1 2 3		3 6	1			1		4 7 1	12
合計										67

3.2 調査/研究期間

2019年2月から2020年3月

3.3 調査内容

3.3.1 海外研修におけるグローバル度自己評価(量的調査分析)

異文化に対する知識、対応するためのスキル、態度について、参加学生が研修前後の変化を自身でどのように自己評価するかという手段としてはルーブリックを使用した(表3)。これは、多様な学修経路から生み出される学生の学びの達成状況を評価する方法の1つとして Association of American Colleges and University (全米カレッジ・大学協会)¹¹⁾が開発した16のVALUE Rubricの内、Intercultural Knowledge and Competency Value Rubricを基に本学の研修内容に合わせ修正し作成したものである。ルーブリックの評価観点の多くは、批判的思考力に求められる要素を分解して明示したものであり¹²⁾、海外研修のように体験からの知識や思考、コミュニケーション力や積極性といった学生の内面的変化を知る上で有効な手段である。各研修の事前研修時にルーブリックについて学生へ説明し、各人が自己評価を行い、海外研修後の事後研修で同じルーブリック評価を再度行った。

3.3.2 個人レポート(質的調査分析)

海外研修の参加学生には、帰国後に研修レポート提出を課している。記載項目は、1) 参加動機、2) プログラムの内容・研修中の体験、3) 文化の違い、4) ミスコミュニケーションや感情・感覚の違い、5) 言語の学びについて、6) まとめ、であり、学生個々の実体験、気づき、思いを自由記述する形態である。それらは彼らがどのような活動や経験から、何を学び、感じているかということをも具体的に知ることができる豊富な記録データであり、各人が研修の学びを振り返るという意図のものだけではなく、研修がどのような意味を持つのかを知る上で貴重なデータである。蓄積した個人レポートを質的データとしてその文脈を丁寧に読み取り、整理することで研修を通して得る学生の学びや気づきを客観的に見直すことが可能である。また、それにより海外研修が学生にどのような影響をもたらすのかという視点から、本学における海外研修の意義を再考し、研修活動(講義、視察、文化体験等)や事前研修(歴史、文化的背景を学ぶ事前課題やグループワーク等)

表3 海外研修におけるグローバル度自己評価 (ルーブリック)

到達レベル 評価指標	C (Beginning) 1 ポイント	B (Developing) 2 ポイント	A (Accomplished) 3 ポイント	S (Exemplary) 4 ポイント	記入欄
指標 A : 知識 (帰属する社会・文化の知識)	帰属する社会・文化的ルールについてあまり知識がない。	帰属する社会の文化的ルールについて知識がある。	異文化体験を通して、帰属する社会・文化的ルールについて新たな理解、発見をし、文化的ルールや偏見、複雑性を認識する。	帰属する社会・文化的ルールについて自己体験と外的情報からの事実を理解し、偏見なく客観的に他者に説明することができる。	
指標 B : 知識 (留学先の社会・文化の知識)	留学先の文化、歴史、社会システム (政治・経済・宗教党)、習慣についてあまり理解していない。	留学先の文化、歴史、社会システム (政治・経済・宗教党)、習慣について部分的に理解している。	留学先の文化、歴史、社会システム (政治・経済・宗教党)、習慣についてだいたい理解している。	留学先の文化、歴史、社会システム (政治・経済・宗教党)、習慣、またそれらの複雑性を十分理解している。	
指標 C : スキル (共感・多文化の多面、複合的視点の考慮)	多文化の視点があることをあまり理解していない。自分の文化からの視点でのみ対応する。	ときに、多文化の異なる視点の存在を認識しながらも、ほぼ自分の文化からの視点で対応する。	自分の文化からの視点ではなく、多角的・複合的視点からの交流を理解している。	異文化体験を通して、自分の文化からの視点ではなく、多文化の異なる視点を多角的・複合的視点で理解し、相手の感情や彼らとの違いを考慮、尊重して行動、交流することができる。	
指標 D : スキル (言語・非言語コミュニケーション)	言語・非言語コミュニケーションについての文化的な違いをあまり理解していないため、話し合いはできない。	言語・非言語コミュニケーションについて文化的な違いがあることに気づき、それらが基になりコミュニケーションにおける誤解が生じることが理解できるが、話し合いはできない。	言語・非言語コミュニケーションについて文化的な違いがあることに気づき、それらの違いを認識して相手と少し話し合いをすることができる。	言語・非言語コミュニケーション (フィジカルコンタクト、直接・非直接的表現、高文脈・低文脈) について文化的な違いがあることを十分理解し、相手と話し合いをすることができる。	
指標 E : 態度 (興味・関心・意欲)	相手の文化についてあまり興味・関心がない。	相手の文化について少し興味・関心があり、簡単な質問をすることができる。	相手の文化を更に知りたいという興味・関心を持ち質問し、回答を求め理解しようとする。	相手の文化について強い興味と関心を持ち、意欲的に質問し、多文化的視点で回答を理解することができる。	
指標 F : 態度 (外向性・対外行動力・積極性)	異なる文化を持つ人々との交流はあまりしない。新しいことには躊躇する。	異なる文化を持つ人々と少し交流できる。相手の価値観についての理解は難しいが、新しいことに対応しようとする。	異なる文化を持つ人々と交流できる。相手の価値観を尊重しようとする。積極的な交流を心がけ新しいことにも挑戦できる。	異なる文化を持つ人々と積極的に交流できる。安易に相手の価値観や考えを決めつけずに尊重できる。新しいことにも率先して行動できる。	
指標 G : 態度 (リーダーシップ・課題解決能力)	自ら行動するよりも人の後について行く。困ったときは人に頼る。	受動的ではあるがグループメンバーへの協力姿勢がある。問題に対して自らの発言は無いが解決策を考えようとする。	グループを盛り上げ、協働作業に貢献できる。問題に対して解決するための提案ができる。	グループメンバーの立場やその場その場の状況に応じて、協働作業を牽引し推し進めることができる。問題に対して、最善の手段を考え行動することができる。	

の内容を検討、改善するための根拠データとする。

3.4 分析方法

3.4.1 量的データ分析

対象者 67 名の事前と事後の自己評価 (指標 A～G、到達レベル 1～4 ポイント) の結果を集計し、事前、事後の平均値、標準偏差、及び改善率を算出した。各質問と事前事後の比較には Wilcoxon のノンパラメトリック検定を行った。統計ソフトは IBM SPSS Statistics Ver. 25 を使用し、有意水準は 5% とした。

3.4.2 質的データ分析

対象者 67 名の個人レポート内容について質的データ分析^{13, 14)}を参考に行った。学生が記載した文章を文脈ごとにその意味や、留学ならでの経験、感情を考慮しながら再文脈化しコード化する作業を繰り返した。次に、コード間の相違点、共通点、関連性を検討・分類し、各コードの集まりをサブカテゴリーとしてグループ化した。サブカテゴリーを同様に整理し、概念の抽象度を上げ、幾つかのサブカテゴリーからなるカテゴリーを生成した。

3.4.3 倫理的配慮

本研究への参加は自由意思によること、また使用するデータは研究目的以外には使用しないこと、匿名性を確保すること等について参加者へ口頭及び文章で説明し、同意書への署名、提出をもって承諾を得た。なお、本研究は高崎健康福祉大学から研究に係る許可(高崎健康大倫 3035 号)のもと実施した。

4 結果

4.1 量的調査分析より

海外研修グローバル度自己評価の回答結果を研修毎に表4から表7に、また、全研修における指標毎の事前事後の平均値差を図5に示す。全研修において事前事後それぞれのポイントの平均に改善がみられ、また、28項目(4研修×7項目)中、25項目について有意差が認められた。指標A、Bは改善率が高く、訪問国の文化、歴史、社会システム等の知識を得ると同時に、帰属する日本の社会を振り返って理解したと回答する学生が多かった。指標Cは全研修において事後の平均値が高く、異文化体験を通してその違いに共感し、多角的視点で考慮することができるようになったと自己評価している。指標Gは改善率の上昇はあるものの、3つの研修で標準偏差の値が上昇しており、他の指標が概ね減少傾向であることと比較すると、評価にばらつきがあったと言える。

4.2 質的調査分析より

対象者67名のレポート記述を前述の方法で分析したところ、82個のコード、13個のサブカテゴリー、7個のカテゴリーに分類することができた(表8)。以下カテゴリーごとに概説したい。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは《 》、コードは『 』、記述内容は「 」で示す。

4.2.1 【参加動機(向学心、向上心)】

このカテゴリーは、動機の中で最多記述数があり、《i. 既存の知識や経験と比較して学ぶ》、《ii. 専門知識、キャリアのため》、《iii. 言語に対する期待》、《iv. 自己への挑戦、向上心》の4個のサブカテゴリーから形成され、自身の専門分野において、また過去の海外研修経験から海外の考えや様子を日本と比較して学びたいと思って参加することを示している。

表4 自己評価結果(ベトナム)

指標	事前平均値/標準偏差		事後平均値/標準偏差		改善率	
A	2.19	0.82	3.37	0.48	53.9%	**
B	1.7	0.66	2.85	0.52	67.6%	**
C	2.78	0.74	3.33	0.67	19.8%	**
D	2.56	0.79	3.11	0.57	21.5%	**
E	2.96	0.74	3.33	0.54	12.5%	**
F	2.85	0.80	3.22	0.63	13.0%	**
G	2.41	0.62	2.81	0.72	16.6%	**
平均	2.49	0.74	3.15	0.59	26.5%	

表5 自己評価結果(オーストラリア)

指標	事前平均値/標準偏差		事後平均値/標準偏差		改善率	
A	2.15	0.53	3.31	0.46	53.6%	**
B	1.62	0.49	3.00	0.78	85.7%	**
C	2.38	0.49	3.54	0.50	48.4%	**
D	2.00	0.68	3.15	0.53	57.7%	**
E	2.38	0.62	3.31	0.61	38.7%	**
F	2.46	0.93	3.23	0.58	31.3%	*
G	2.00	0.55	2.85	0.86	42.3%	*
平均	2.14	0.61	3.2	0.62	49.5%	

表6 自己評価結果(フィンランド)

指標	事前平均値/標準偏差		事後平均値/標準偏差		改善率	
A	2	0.71	3.25	0.56	62.5%	**
B	1.44	0.61	2.81	0.53	95.1%	**
C	2.19	0.73	3.38	0.60	54.3%	**
D	2.44	0.50	3.13	0.48	28.3%	**
E	2.44	0.50	3.25	0.56	33.2%	**
F	2.38	0.60	3.31	0.77	39.1%	**
G	2.06	0.66	2.88	0.70	39.8%	**
平均	2.13	0.61	3.14	0.60	47.4%	

表7 自己評価結果(ドイツ)

指標	事前平均値/標準偏差		事後平均値/標準偏差		改善率	
A	1.92	0.28	3.08	0.64	60.9%	**
B	1.67	0.47	3.00	0.71	80.0%	**
C	2.33	0.85	3.25	0.60	39.3%	*
D	2.33	0.75	2.83	0.37	21.4%	
E	2.83	0.69	3.25	0.60	14.7%	
F	2.75	0.83	3.25	0.60	18.2%	
G	2.33	0.75	3.08	0.49	32.1%	*
平均	2.31	0.66	3.11	0.57	34.6%	

*:p<0.05, **:p<0.01

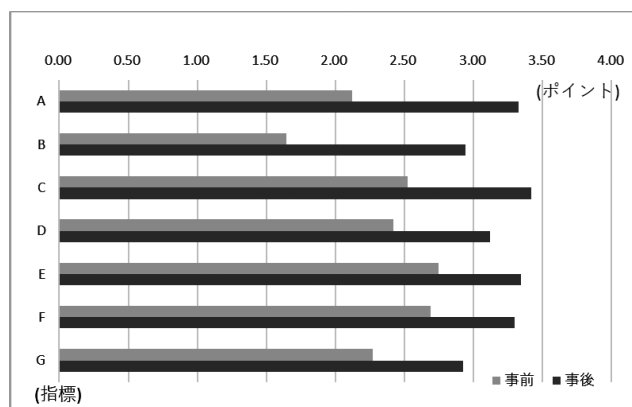


図5 自己評価の変化

4.2.2 【参加動機（人との関わり）】

このカテゴリーは《v. 人との繋がり、ふれあい》から形成される。本学が実施している留学生受入プログラムへの参加や、外国人の友達が欲しいといった動機の他、本学他学科の学生とも親しくなりたい等、人に関わりを持つことに期待する動機である。

4.2.3 【参加動機（漠然とした興味）】

このカテゴリーは《vi. 新しさ、未知への興味》、《vii. 事前情報、渡航の条件、事情》、の2個のサブカテゴリーから形成される。外国への憧れや新たな体験を求める他、先生、先輩からの勧めや海外研修報告会がきっかけである。

4.2.4 【比較からの学び】

このカテゴリーには、全体の中で最多記述数があり、《I. 現地での授業、視察、人々との関わりから知識、考えを深める》、《II. 異なる生活、文化に触れて価値観の違いに気づく》、の2個のサブカテゴリーから形成される。I. ではプログラムの中でアカデミックな学びや気づき、II. では生活、文化についての気づきが述べられているが、いずれも既存の知識、または日本との比較から学び得たものとして述べられている。

4.2.5 【自己の内面に向き合う】

このカテゴリーは《III. 現地の体験から成長を感じ向上意欲を得る》、《IV. 言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する》、の2個のサブカテゴリーから形成される。III. は自己を振り返り、向上心や自信がついたなどのプラスの変化で、IV. は痛感した知識やスキル不足のマイナスの自覚である。

4.2.6 【人との関わり】

このカテゴリーは《V. 人とのふれあい、協力を経て知る感謝の気持ち》である。現地の学生、教員の他、

研修に携わる人々と接することにより得た喜びや感謝の気持ちと、一緒に参加した他学科他学年の本学学生からの刺激を学びとしてまとめている。

4.2.7 【展望】

このカテゴリーは《VI. 期待、希望、思いを叶える》であり、4.2.4、4.2.5、4.2.6の学びや気づきを経て生まれた未来への思いである。

5 考察

前項の結果4.1において4研修の指標A～Gのほとんどに有意差が認められ、知識（日本、留学先の社会、文化）、スキル（共感・多文化の多面、複合的視点の考慮/言語・非言語コミュニケーション）、態度（興味・関心・意欲/外向性・対外行動力・積極性/リーダーシップ・課題解決能力）において、海外研修への参加により向上の効果が見られた。その具体的な内容を前項の結果4.2でまとめたが、図6では構造図として可視化した（コードは表8の主なものに記載）。これらを重ね見て、以下3つの点で考察する。なお、学生レポート記述内容の後に（派遣国名、所属学科名）を記す。

5.1 現地の体験からの比較、気づき

結果4.1では、指標A「帰属する社会・文化の知識」B「留学先の社会・文化の知識」、の改善率が高いことから、学生が、訪問国の文化、歴史、社会システム等の知識を得ると同時に、帰属する日本の社会を振り返って理解したと言える。そしてその裏付けとなる記述を結果4.2.4【比較からの学び】から抽出することができる。ベトナムでのバイクの多さや街中の渋滞事情、オーストラリアで貴重な水を大切に使うホストファミリーの環境に対する考え方等、生活してみて初めて日本との違いに気づいたようだ。「医療の質が高い病院は人気が集まり朝早くから行列ができ、質が低い病院は貧しい人々を限界以上に受け入れ、廊下にまでベッドが置かれていた。これには両者とも衝撃をうけた」（ベトナム 理学療法）のように、実際の医療現場を見る事で、衝撃を受けたり、疑問を持ったりしながらそれぞれの理解に結び付けていく。また、看護の学内実習に参加した学生は「教授を交えながら、全員が真剣にディスカッションをしていた」（フィンランド 看護）と記述しており、学生の積極性や、学ぶ姿勢に感化され、思いを新たにしている。本学の特徴である現地体

表8 レポート内容分類表

【カテゴリー】	《サブカテゴリー》	『コード』	データ数
参加動機（向学心、向上心）	i.既存の知識や経験と比較して学ぶ	過去の研修経験からさらに自己のレベルアップをしたい	3
		日本との違いを知りたい	1
		異文化への興味	6
		日本との違いを学び、さまざまな知識を得たい	5
参加動機（人との関わり）	ii.専門知識、キャリアのため	過去に参加した海外研修で学んだこととの比較	6
		自身の専門分野以外について学ぶチャンス	1
		カンボジアの医療を見た経験から他の国も見て視野を広げたい	1
		教員になるために活かすための語学向上と体験	2
参加動機（漠然とした興味）	iii.言語に対する期待	自身の専門についての海外の考えや様子を学びたい	28
		医療機関など普通は見学の難しいところを見学できる	2
		海外で教員になることを視野に入れている	1
		言語能力の向上	8
参加動機（人との関わり）	iv.自己への挑戦、向上心	海外で英語を使ってみたい、話したい	6
		文化の共存、自分にできることは何かを考えたい	1
		自分自身の成長	6
		他学科の学生と仲良くなりたい	2
参加動機（比較からの学び）	v.人との繋がり、ふれあい	留学生受入れプログラムがきっかけ	8
		身近にベトナム人がいた	2
		外国人の友達が欲しい	5
		ベトナム人、ベトナム研修が大好き（この先ずっと続いてほしい）	1
参加動機（比較からの学び）	vi.新しさ、未知への興味	新たな出会いを楽しみにして	1
		外国へ行くことへの憧れ	20
		新たな体験（非日常）を求めて	7
		その国、地域の遺産や自然に魅力を感じた	2
参加動機（比較からの学び）	vii.事前情報、渡航の条件、事情	オーストラリアは良い国だと聞いた	1
		現地の日本人学生にそこで学ぶ理由を聞きたい	1
		時差がなく行きやすい	1
		先生、先輩から勧められた	4
参加動機（比較からの学び）	I.現地での授業、視察、人々との関わりから知識、考えを深める	海外研修報告会に参加し興味を持った	2
		視野を広げたい(旅行でなく大学の研修が良い)	1
		初めての海外で不安なため大学の研修を選んだ	1
		コミュニケーションに必要なことは何かを学んだ	37
参加動機（比較からの学び）	II.異なる生活、文化に触れて価値観の違いに気づく	異なる授業スタイル、医療・福祉・教育施設の仕組みを知ることで受ける衝撃や感動	58
		他学科の学びを知ることができて良かった	4
		JICAの協力内容について詳しく学べた	2
		会話重視の英語授業が印象に残った	9
参加動機（比較からの学び）	III.現地の体験から成長を感じ向上意欲を得る	現地で実際に見聞き経験することの良さを学んだ	3
		日本を離れてみることで日本のことが見えてきた	3
		出身国による英語の発音や特徴の違いに気が付いた	5
		海外で認知される日本を知った嬉しさ	3
参加動機（比較からの学び）	IV.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	国柄だけで相手を決めつけない	5
		国柄や慣習、感覚の違いを知る	50
		他の国の人は意見をはっきり言う	7
		外国人、外部者として見られる違和感があった	4
参加動機（比較からの学び）	V.人との触れ合い、協力を経て知る感謝の気持ち	街並み、建物事情	21
		交通事情（渋滞、ルール、乗り物など）	28
		食事事情（味付け、食習慣など）	16
		習慣事情（生活、男女、家族など）	40
参加動機（比較からの学び）	VI.期待、希望、思いを叶える	水道事情、資源、環境の違い	13
		物価の違いによる金銭感覚の違い	1
		多文化について知ることの面白さ	8
		個性や自己が尊重されている	7
参加動機（比較からの学び）	VII.現地の体験から成長を感じ向上意欲を得る	母語以外の言語力の高さを感じた	4
		日本とは違う生活や体験を楽しんだ	25
		異なる文化を知ったり受入れたりすることのできる研修だった	9
		英語力、学習意欲が向上した	35
参加動機（比較からの学び）	VIII.現地の体験から成長を感じ向上意欲を得る	緊張が解けて聞き取れるようになった	1
		ディスカッションの授業は語学力向上につながる	1
		英語以外の外国語にも興味を持った	3
		これまでの自分を見直すきっかけになった	1
参加動機（比較からの学び）	IX.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	積極的な行動が自身の力になる	1
		他国の学生の積極性に感化された	9
		自信をもって積極的に行動することの大切さを学んだ	20
		コミュニケーションの楽しさを感じた	1
参加動機（比較からの学び）	X.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	多くの気づき、学びを得て自身が成長した	18
		英語力不足を実感した	24
		リスニング力は向上したが話すのは難しかった	2
		英語で相手と意思疎通することの難しさの経験	21
参加動機（比較からの学び）	XI.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	言葉が分からないことでミスコミュニケーションがおきると実感した	1
		日本について自己の知識が不十分であることを実感した	5
		自己の積極性が不十分だったことを後悔した	2
		日本文化の紹介をして交流を楽しんだ	2
参加動機（比較からの学び）	XII.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	本学の仲間と一緒に楽しめ、頑張れた	12
		現地の人との交流・繋がりをもてた	5
		研修で人々の優しさを受け、自分もそのようになりたいと思った	3
		看護師は世界に活躍の場があり、看護のつながりで現地の人と密に関われる	1
参加動機（比較からの学び）	XIII.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	海外への興味、国際交流への関心が増した	13
		今後の学習、生活に活かしたい	17
		将来の自身のキャリアに活かしたい	1
		研修に参加していない自分の学科の人達に海外研修の良さを伝えたい	1
参加動機（比較からの学び）	XIV.言語、コミュニケーション、知識の不十分さ、力不足を実感する	本学にきて良かった、夢が実現した	1
		出会った人にまたドイツで会いたい	1

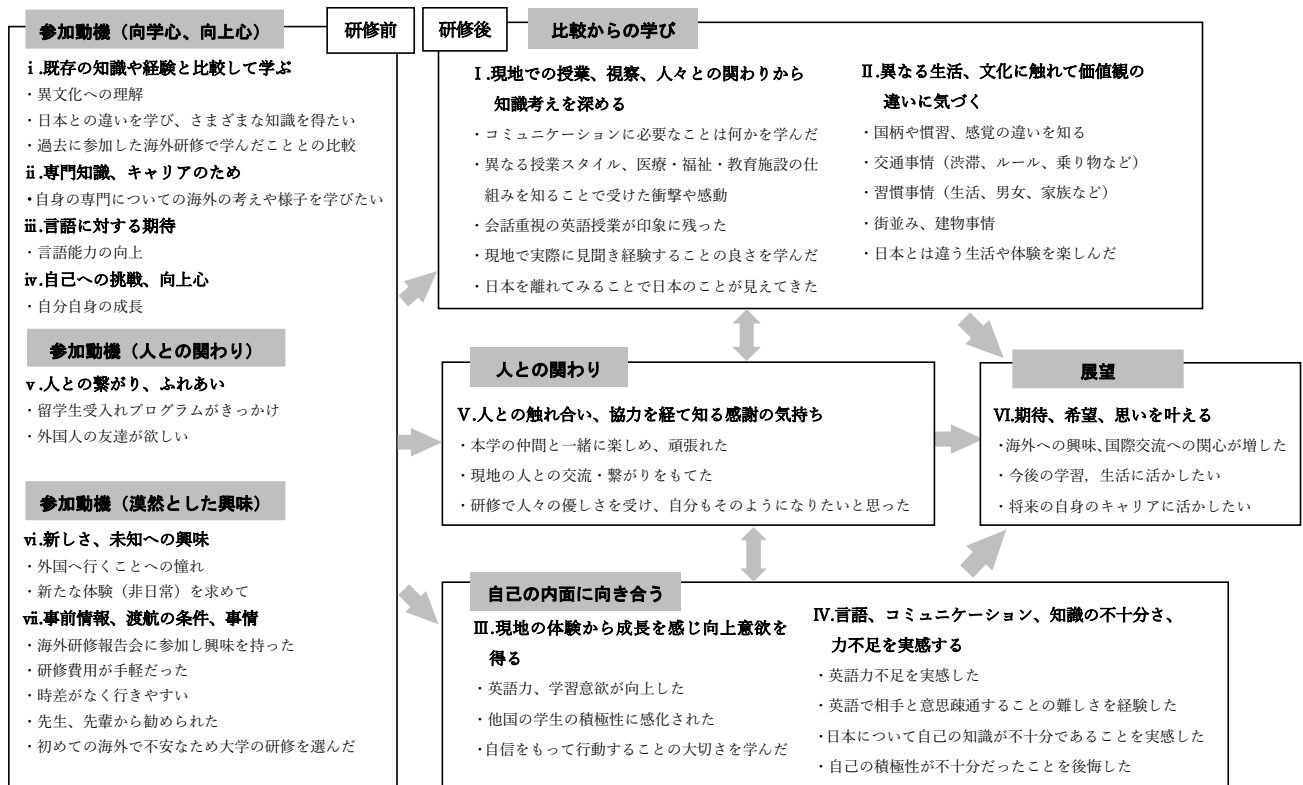


図6 参加動機と研修で得た学びの構造

験型プログラムが、学生の気づきを呼び起こし、学習動機に及んだと考えられる。

5.2 コミュニケーションについて

結果 4.1 の指標 C「共感・多文化の多面、複合的視点の考慮」D「言語・非言語コミュニケーション」においても、数値に改善が見られた。学生は言語のスキルアップを期待して研修に参加するも、自己の力不足や知識の不十分さを痛感する。そして同時に非言語でもコミュニケーションが取れることに気づき喜びも感じたようだ。レポート内で、「残念ながら英語力もベトナム語力も成長しなかった。しかし大事なことは伝えたことをどう伝えていくか考えることだと思う。…話せなくとも翻訳機やジェスチャーを使えば伝わるが多かった。コミュニケーション力を養えたのではないと思う。」（ベトナム 健康栄養）とあるように、『コミュニケーションに必要なことは何かを学んだ』と言葉にする学生が多かった。短期間の海外研修では目に見えて言語力が向上することを期待するのは難しいが、言語のみに頼らずにコミュニケーションを試みた結果から得た気持ちであろう。また、「私はこの研修で相手の文化や歴史について理解する力が強くなった

と感じている。自分たちの当たり前とは違う場面に直面して、“おかしい”、“日本に比べて未発達だ”、と思うこともあったが、なぜそうなのか理由を聞き考えることでまた違った感想が生まれてくる。」（ベトナム理学療法）「他の外国人とも話す機会があり、ベトナム人とはまた異なる常識をもっていた。それぞれの常識を良し悪しで判断することなく、尊重する態度で受け入れればより深い理解に繋がると感じた。」（ベトナム理学療法）とあるように、相手の文化背景や異なった習慣などを理解、受け入れ、更に尊重することで円滑に意思疎通できるようになったと言えよう。

5.3 人との関わりについて

結果 4.1 の指標 E「興味・関心・意欲」F「外向性・対外行動力・積極性」G「リーダーシップ・課題解決能力」では、全て改善しているが、Gの「リーダーシップ・課題解決能力」については事後の標準偏差の数値が上昇したことから、自己評価に個人差があることを示している。短期間でリーダーシップの涵養を期待することは難しい。しかし、研修がその芽生えのきっかけとなっていることも確かである。それは、結果 4.2.6 の【人との関わり】からも読みとれる。本学の研修は、

ホームステイやゲストハウス、アパートメント等に複数人で宿泊することが多い。「10 日間以上、家族以外のひとと 24 時間生活するという環境は私にとって初めての経験で、始めは友人との生活リズムの差に戸惑ったが、お互いがお互いの生活リズムを理解することで気持ちよく生活することができた。集団で生活すると、普段とは違いストレスがたまりやすくなるが、…私はこのような集団生活の中で自身の協調性を磨くことができた。」(ベトナム 薬) とあるように、学生が親元を離れ他人と寝食を共にするような機会は稀であり、短期間といえども、海外という非日常の環境においてはストレスなことも多い。

「乗るべき電車で迷っていると声をかけて助けてくれる人がいた。また、道で迷子になって通りすがりの人に話しかけると一緒になって目的地の場所を探してくれた。」(オーストラリア 薬) など、交通機関、宿泊先等での言葉の不自由さ、ルール、習慣の違いなどが壁となる。その一方で、現地の人の優しさに触れ、一緒に参加した本学学生と失敗や成功を重ね協力しながら過ごしていくことでリーダーシップ、協調性が生まれ、他者への配慮や社会で必要な力を備えていく。

その他、先輩からは専門の知識を、他学科の学生からは専門外の情報を得ることができ、海外に居ながらにして日本の現状を含め、各人の経験値をシェアする機会にもなったようだ。「フィンランドの教授、学生や人々だけでなく、一緒にいった仲間や先生たちに助けられながら、協力し合いながら研修を終える事ができ、本当に感謝だなと感じた。様々な人の協力や努力があってこの素晴らしい経験をする事ができたのでその気持ちを忘れないで今後活かしていきたい。」(フィンランド 看護) とあるように、先に述べた【比較からの学び】や【自己の内面に向き合う】等、各人の学びには、訪問先での助けやもてなし、時間を共にする参加学生同士の協力など、どれも人との繋がりから得られることが多く、学生自身がそれに気づくことも研修の大きな価値の一つと言えよう。

5.4 今後の課題

本調査では自己評価の測定にルーブリックを使用した。実施の際は学生に指標内容の説明を行い、調査データとして研修前後の差を見ることはできたが、学生が共有する問題について直接ルーブリックを参照しな

がら討論すること、自分の行動を評価するのにルーブリックをどう使うことができるか、どう使うべきなのか¹²⁾というルーブリックの教育的利用が十分であったとは言えない。今後は学生の目標達成のためのツールとして用い、効果的に自己評価できるようルーブリックの表現を検討し、事前・事後研修時に活用していきたい。

また、渡航先による差異の分析には至っていないが、学生の経験値を考慮することも必要であろう。例えば、ドイツ研修では、参加者の半数近くが海外研修経験者であったが、指標によってはほとんど事前値が高く、それが改善率の低さに影響した可能性がある。オーストラリア研修では、参加者の 60%以上が 1 年生であったが、それが事前平均値の低い指標に影響したとも考えられる。今後はさらに詳細な要素を取り入れて分析を深めていきたい。

その他、これらの調査について、研修直後の結果だけでなく、在学中、または卒業後のキャリアにどう影響していくのかといった長期的な視点で、今後継続的に追っていくことが望ましい。

6 むすびにかえて

本学の国際交流プログラムについて、海外研修に参加した学生の体験を通した学びと気づきを量的、質的の両面から分析し、海外研修が学生に及ぼす影響を追求し考察することを試みた。その結果、海外研修グローバル度自己評価では特に指標 A「帰属する社会・文化の知識」、指標 B「留学先の社会・文化の知識」の改善率が高く、訪問国の文化、歴史、社会システム等の知識を得ると同時に、帰属する日本の社会を振り返って理解したと自己評価する学生が多かった。また指標 C「共感・多文化の多面、複合的視点の考慮」の事後の平均値の高さから、学生は異文化体験を通してその違いに共感し、多角的視点で考慮することができるようになったと言える。指標 D「言語・非言語コミュニケーション」では、自己の力不足や知識の不十分さを痛感しながらも、どうすればコミュニケーションが取れるのかということ学んだ。指標 G「リーダーシップ・課題解決能力」でも改善が見られ、これらは学生の個人レポート分析からも読み取ることができた。学生が日本とは異なる社会に身を置き、実際の現場を見て受ける衝撃や日本との違いに疑問を持つといった【比較

からの学び】や、【自己の内面に向き合う】等、体験、人との関わりを通して、各人の成長に繋がったと言える。

筆者らは海外研修に同行し、学生が、新しい知見、知識を得ただけではなく、研修をどのように捉え、自己の資質を高める機会としたかという視点で彼らの成長や変化のきっかけを見てきた。それらを論理的に説明することは難しいと感じていたが、今回の調査、分析により、海外研修が学生に及ぼす一定の効果を示せたと考える。

注

- [1] 本学の海外提携教育機関は、オーストラリア、インドネシア、台湾、タイ、ベトナム、ドイツ、フィンランド、オランダの主に共通の専攻を有する 10 大学である。短期海外研修は学生の自由参加であり、参加者は事前・本・事後研修の参加、課題実施により規定の単位が認められる。本報告ではベトナム、オーストラリア、フィンランド、ドイツの 4 教育機関で行われた研修が研究対象であり、学生支援機構の協定派遣プログラムとして支援を受け実施した。
- [2] 本学は 2020 年現在、健康福祉学部（医療情報、社会福祉、健康栄養学科）、保健医療学部（看護、理学療法学科）、薬学部（薬学科）、人間発達学部（子ども教育学科）、農学部（生物生産学科）の 5 学部 8 学科から成る。

引用・参考文献

- 1) 内閣官房. 若者の海外留学促進実行計画：
<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/pdf/honbun.pdf> (2020 年 8 月 5 日参照)
- 2) 独立行政法人日本学生支援機構. 2018 (平成 30) 年度日本人学生留学状況調査結果：
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student/_s/_icsFiles/afiedfile/2020/04/21/datar01n.pdf
(2020 年 8 月 5 日参照)
- 3) 総務省. グローバル人材育成の推進に関する政策評価＜結果に基づく勧告＞：
https://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/107317_00009.html#kekkahoukoku (2020 年 9 月 1 日参照)

- 4) 学校法人河合塾. (2018). 文部科学省委託「日本人の海外留学効果測定に関する調査研究」
- 5) Hammer, M., & Benett, M., Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity : The intercultural development inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, 27(4), 421-443.
- 6) Vande Berg, M., Paige, R.M., & Lou, K.H. (2012). Student Learning Abroad: What Our Students Are Learning, What They're not, and What We Can Do About It. Sterling.
- 7) Salibury, M.H., An, B.P., & Pascarella, E.T. (2013). The effect of study abroad on intercultural competence among undergraduate college students. *Journal of Student Affairs Research and Practice*, 50(1), 1-20.
- 8) Pamela, R., Elizabeth W., & Inge S. (2014). Assessing Education Abroad Outcomes: a review of the BEVI, IDI, and GPII. Michigan State University International Center :
https://educationabroad.isp.msu.edu/files/2914/9486/1612/Assessing_EA_Outcomes_WhitePaper.pdf
(2020 年 5 月 29 日参照)
- 9) Wong, E.D. (2015). Beyond "It was Great" ? Not so Fast! A response to the argument that study abroad results are disappointing and that intervention is necessary to promote students' intercultural competence . *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 26, 121-135.
- 10) 中島有季子. 沼沢明美. 町田修三. ターン, クリストファー. (2016). 高崎健康福祉大学国際化の歩み—3 年間の軌跡—. 高崎健康福祉大学紀要, 15, 155-167.
- 11) Association of American Colleges and University (AAC&U). (2009). Critical Thinking VALUE Rubric. Retrieved from <https://www.aacu.org/value-rubrics> (2018 年 8 月 8 日参照)
- 12) ダネル, ティーブンス, レビ, アントニア. 佐藤浩章・井上敏憲・俣野秀典(訳). (2014). 大学教員のためのルーブリック評価入門. 玉川大学出版部
- 13) 佐藤郁哉. (2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践. 新曜社
- 14) 田中千枝子(編). (2013). 社会福祉・介護福祉の質的研究法—実践者のための現場研究. 中央法規出版株式会社

受付日 2020 年 12 月 17 日、受理日 2021 年 3 月 13 日